

末黒野

すぐろの

11月号 (通巻831号)



新涼

小川玉泉

(名譽主宰)

新涼の御堂尺余の丸柱

身の内に沁むる朝蟬広島忌
漁火の誘ふ郷愁夏の果て
縁に坐し蟬を聴き分けゐたりけり
新涼の御堂尺余の丸柱
つくつくし鳴きつぎ妻の大祥忌
妻の忌の墓域を去らず銀やんま

今年の暑さは異常で、立秋を過ぎてても外気は三十五度前後という日がつづいた。旧盆に続いて、妻の三回忌・大祥忌を迎えた。外の残暑と違って本堂は風が通り涼しさを覚えた。これまで何度も法要に列しながら、気付かなかつた、本堂の大屋根を支えている丸柱の太さ。優に三十糎を超えていると思つた。妻の霊が気付かせてくれたのだと思ひ、読経に身が入つた。

盆

野の川に鍬の漬けられ涼新た
耳鳴りの朝から止まぬ秋暑かな
借景の三浦富士晴れ木槿垣
桃の汁指に携带着信す

松本三千夫

岐れ道カンナに惹かれ右を採る
灯台の島へ磯波盆の波
舟揚げのその手で漁師門火焚く
踊りの灯届かぬ杜に見る阿呆
秋野行く山のあなたを口遊み
行き止まりかも知れぬ道草の花
秋の雲肩の辺りの力抜き
赤提灯並ぶ駅裏秋の暮

八千草

黒滝志麻子

(副主宰)

溪流のしぶきの勢ひ今朝の秋
一僧も見えざる寺の残暑かな
首筋に絡みつきたる秋暑かな
曲り家に別れ鳥や山の翳
跳ぬるたび佞武多の太鼓地に響く
患うて子の家に食ふ初秋刀魚
秋涼し山風に揺れ垂あらた
格子戸を曳く手の影や秋夕焼
山風に花増やしたる沢桔梗
すぐそこに分るる瀬音ねこじやらし
八千草の匂うて雨のあがりけり
山と雲触れ合ふ空や鬼やんま

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

残暑

安齋久英

稜線を梅雨の名残の二日月
雪洞の淡きを巡る夏越かな
頂へ道一本や青すすき
考に似る土地の顔役祭笛
送り火にいささかの風添へやりぬ
デモ隊のシュプレヒコール街残暑
秋蟬の一声落し果てにけり
盆の窪掠めて木の実地に弾む
バイク音残暑の午後を掻き立てて
向付に引き上げ湯葉や夜の秋

青田風

石黒興平

鬼灯市妻大胆に値切りをり
ふるさとや総身に受くる青田風
日と水と風の育む青田かな
繰り言をまたも飲み込み洩団扇
幼子の鼻筋白し祭髪
林間学校脱ぎたる靴の泥まみれ
甚平をあさりつフリーマーケット
炎天を来て心搏を確かむる
冷房を出づや真昼の葬の列
鬱々と暑さ理由の懈怠かな



銀河

大橋伊佐子

喫茶去の色紙清しき新茶かな
ひつそりと息殺しゐる炎暑かな
連日の大暑乗り切る一日かなかな
働けることに謝しゐる夜涼かな
マツカーサー知らぬ世代やサングラス
語られぬ思ひ出もあけ土用干し
夕端居心の奥に夫のゐて
銀河濃し元気を出せと亡夫の声
流星や九十年を生きし空
ラムネ抜く昭和の音のひびきけり

盆

田中臥石

穂孕みの田へ音たてて用水路
谷川の滝となりけり山法師
向日葵や生きて八十何遺す
己が墓におんはは眠り盆迎ふ
盆棚を仕舞ふきらきら微塵光
鮫出でて海静かなり盆四日
秋風と思ふ木蔭の木椅子かな
朝風の海透く網戸潮霏
盆過ぎの早稲刈られけり街境
倒伏の稲や台風矢継ぎ早

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



日の盛 岡野里子

招き猫江戸風鈴をひさぐ店
蚕の家にてるてる坊主棕櫚の花
ひと本に千の枇杷の実鴉啼く
はちす葉のうてなにまろび雨の粒
焼鮎の躍る尾びれや化粧塩
棟梁の枕は木切れ三尺寝
川の名の此処より変はり月見草

麦わら帽 加藤静江

産土の静寂に香る茅の輪かな
だんご屋の漢ばかりや夕立晴
子供らの清掃奉仕麦わら帽
雨あとの放水激ち蓮の池
古民家の土間につややか小玉葱
滝壺の深さを見せぬ飛沫かな
病葉やただの石とも仏とも

涼新 た 菅野日出子

白南風や茶房を洩るるジャズピアノ
向日葵の皆我に向くおかしさよ
夫の忌や薄暑の墓へ集ふ子等
百畳の伽藍に座すや涼新た
秋の蚊や昼なほ暗き座禅堂
ケロイドの消えぬ友の手広島忌
師の句集拾ひよみして灯の涼し

青炎集

松本三千夫選

横浜 早川八重子

青すすき風に指揮棒ある如く

子育ての遠くなりけり合飲の花

女子校の窓辺に揺れて百日紅

蟬生まれ朝のひかりを捉へをり

恙なく余生の土用鰻かな

辞書を引く気力を奪ふ暑さかな

横浜 辻井ミナミ

伊吹山毒や薬のお花鳥

鮎の竿等間隔に川の中

匣鮎売り切れの札釣具店

青田分け真つ直中を一両車

梅花藻の戦ぐ流れや川涼し

醒井の流れに群れし川蜻蛉

横浜 中島ひろし

青嵐撫で肩うすき道祖神

珍客へ首振つてゐる扇風機

朝顔の双葉に花の彩ありぬ

炎昼を回転ドアが裏返す

昼寝覚め白き時間を持って余す

夏負けの顔の居並ぶメトロかな

箒目に波音生まる夏の果て

立秋や自宅鎌倉一万歩

国引きの島の夕日や秋立ちぬ

激辛の海軍カレー秋暑し

新涼や雷門の下駄の音

散髪を終へて地上へ秋めきぬ

新宿 稲垣佳子

雷鳴や地球を掴む大樹の根

こだまして老鷲しばし谷戸の主

夕闇の宙にただよひ百日紅

こぼれつぎ日々新しき凌霄花

大仏の影の移りぬ大西日

松籟に闇の匂ひや夏果つる

大網白里

梅雨明や水神様の棟上る

氏神に五色の幟夏つばめ

通り雨猫の目光る木下闇

月一の受診のあとや大夕焼

積ん読を積みなほしたり涼新た

水杣の芯の残れり赤とんぼ

岡井マズミ

焼酎や吾が正論の孤立せる

マラソンのうそなき顔や玉の汗

ラムネ玉昭和の音を落しけり

両腕にゴルフの日焼濃かりけり

預り兎漸く馴れぬ天瓜粉

郭公の峯青々と雨いたる

横浜

高橋

明

横浜

塚越弥栄子

東京

福田禎子

万緑に日々吞まれゆく村一つ

山襷を洗ふがごとき男滝かな

公園の熱気まとひて百日紅

弁天の横座りなる猛暑かな

孟蘭盆や千里をかけて考と妣

朝顔のつぼみに明日の色おもふ

横浜

山咲和雄

横浜

今村千年

雲映る水面かきまぜみずすまし

息災の証と届くさくらんぼ

無点句を忘れ句友と暑気払ひ

もたさるる携帯傘や炎天下

UFOを受信するかに蜘蛛の網

両の手にたまる清水を待つ至福

抱く稚のずしりと重き暑さかな

向日葵やビルの谷間の保育園

漁火を遠見の湯宿夜の秋

草いきれ北前船の寄りし浜

山間の分校跡や草いきれ

露天湯に届くせせらぎ涼新た

耕 土 集

黒滝志麻子選



デパートは通り抜けのみ油照

小嘶にたつぷり笑ひ夏の果

いつせいに乱るる蓮の葉裏かな

幾年の想ひ出秘むる扇風機

初なりのゴーヤ摘み取る試作かな

横浜 岡 美智子

揚花火待つや宇宙へ目を凝らす

蓮見会今朝開く紅すがすがし

体温を越す残暑の日街ゆがむ

語り部の追憶に泣く原爆忌

朝顔の色濃き今朝の小風かな

塩川 君子

駄菓子屋の店先盛る夏休み

二歳児の爪先赤き素足かな

炎天やうなりの荒き救急車

暮仇の白寿祝へり夏座敷

恒例の人間ドック夏の果

小野 弘正

夏の夜の早打ち太鼓夜又の面

このベンチ座る誰れもが汗拭ふ

慣れぬ手の百の溜息袋掛

御決りのすいとん食ふや終戦日

蛸や解けぬ問題あと一つ

飯田久美子

頃合ひを見るせはしさや梅を干す

畦道の花付胡瓜採りて買ふ

炎天や不動の釣師影持たず

渋滞の車中和みぬ夾竹桃

羅を着て母出でぬ音の無き

今野 明子

絵団扇の隠す媼の欠伸かな

歌麿の絵団扇江戸の風生る

つつがなき二人暮しや茄子の花

端居する背に漂ふ静寂かな

行きずりのシャボンの香り藍浴衣

東小蘭美千代